

ORIENTAL STUDIES TRIPOS Part I

Japanese Studies

Monday 1 June 2009 13.30 – 16.30

J.2 MODERN JAPANESE TEXTS, 1

*Candidates should answer **both** sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1

Rough Work Pad

**You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.**

SECTION A

- 1 Translate the following passage from an **unseen** text into English:
[50 marks total]:

夢を見なくなった。眠りはいつも唐突に訪れ、さながら短い死を経てこの世に戻ってきたようにすべて忘れて目が覚める。毎日がこの繰り返しだった。睡眠薬のせいだとわかってはいたが、いざ夢を失ってみると自分が空っぽで薄っぺらになった気がした。そればかりか、目覚めている時でさえも現実なのか夢なのか、わからなくなることもある。思考は水の流れに似ている。水はあちこちに流れ込み、途絶えたり、一緒になって勢いを得たり、どんよりと溜まったりもする。夢の中の恐怖や歎びや不可思議。それは自分の細かい水路の記憶だったのだ。夢があるからこそ、現実はずかしくて揺るぎないものだった。今の自分は、兩岸をコンクリートで固められてまっすぐな水路を否定なく流されていく水だ。流れる意思など持てない水。決められた事柄をこなすだけの味気ない日々。現実のつまらなさや夢を失ったことは見事に連動している。この朝の目覚めだって夢でないとは言いきれない。

内海純一はしばらくベッドに横たわったまま、アパートの天井を眺めていた。長年の喫煙で黄ばんでしまった合板ボードに、カーテンの隙間から洩れた太陽の光が当たっている。明るい部分が、いびつな平行四辺形に見えた。外は晴れている。気温は二十五度以上。これが今日の現実らしい。木の葉を揺るがす風の音が微かに聞こえている。内海は木綿のシャツと素肌の間に入り込む爽やかな風の感触を思い出した。こんな晴れた夏の日は、乾いた風が吹き渡って気持ちがいいはずだ。内海は、北国の夏しか知らないのを少し残念に思った。ハワイやタヒチなど、南の島に吹く風はもっと熱く湿っているのだろうか。その風に匂いはあるのだろうか。強く吹くのだろうか。

札幌近郊で生まれ、警察官の父親の赴任地と一緒に転々とした内海は、北海道以外に住んだことがない。道外に出たのは、新婚旅行で東京に行った時のみ。それも、わずかに三泊四日の旅。父と同じ警察官という仕事柄、長い旅行は許されないので。新妻は物足りなさそうだったが、内海は東京など一度で充分だと思った。海外に行きたいという願望も持ったことはない。それなのに、今朝の内海は、生まれて初めて南の島に行きたいなどと考えている。海べりに座って寄せる波を眺め、これまで吹かれたことのない風に吹かれて日がな一日過ごしてみたいと思っっているのだ。

内海純一	Utsumi Jun'ichi
睡眠	sleep
合板ボード	plywood
いびつ	distorted
木綿	cotton
札幌	Sapporo
赴任地	place of appointment, posting

Kirino Natsuo, *Yawarakana hoho*, jō (2003), pp. 202–204.

SECTION B

Candidates should answer TWO of the following three questions.

2 Translate the following passage from a **seen** text into English: [25 marks]

今、このことを思い出して、自分はこの母に生まれたこの子から、その父を想像せずにいられた。そうしてその人の今の運命までも想像せずにいられない。自分は妙な連想からこの女の人の夫の顔や様子をすぐ思い浮べることができた。自分が元いた学校に、級はそれほど違わなかったが年はたしかに五つ六つ上で、曲木という公卿華族があった。自分はその男を憶い出した。彼は大酒家であった。大酒をしてはいつも、大きなことを言っていた。驚鼻の青い顔をした、大柄な男で、勉強は少しもしなかった。二三度続けて落第して、とうとう自分で退学してしまったが、日露戦争後、上州製麻株式会社とかいうのの社長として、何かの新聞でその名を見た。自分はふとこの男を思い浮べて、あんな男ではないかしらと思った。しかし彼は大言壮語をするだけで別に気むずかしいという男ではなかった。どこか快活で、ヒョウキンなところさえあった。もともと、そんな性質はあてにならぬことが多い。いかに快活な男でもたびたびの失敗に会えば気むずかしくもなる。陰気にもなる。きたない家の中で弱い妻へ当り散らして、いくらか憂いをはらすというような人間にもなる。

この子の父はそんな人ではないだろうか。

女の人には古いながらも縮緬の単衣にお納戸色をした帯をしめている。自分には、それらから、女の人の結婚以前や、その当時の華やかな姿を思い浮べることができる。さらにその後の苦勞をさえ考えることができた。汽車は小山を過ぎ、小金井を過ぎ、石橋を過ぎて進んだ。窓の外はようやく暗くなって来た。

女の人が二枚端書を書き終った時、男の子が、「母アさん、しっこ」と言い出した。この客車には便所が附いていない。

「もう少し我慢できませんか？」母は当惑して訊いた。男の子は眉根を寄せてうなずく。

女の子は、男の子を抱くようにして、あたりを見廻したが別に考えもない。

「もう少し、待ってネ？」としきりになだめるが、男の子は身体をゆすって、もらしそうだという。

間もなく汽車は雀の宮に着いたが、車掌に訊くと、その間はないからこの次になさい、という。この次は宇都宮で八分の停車をする。

